

かたりべ 65

豊島区立郷土資料館だより

第3回収蔵資料展

* 3月31日(日)まで開催!

思い出は資料館へ・2

― 区民寄贈生活資料展 ―

■あなたは何を残したいですか?そして何を伝えたいですか?

展示期間中に実施する展示説明会などでは、館内に展示してある資料が区民の方の寄贈によるものであるということを話すと、見学者からは、それは思いもかけないことだったという感想をいただくことがよくあります。そして、その資料がどのような経緯で当館へ収蔵されることになったのか、ということをお話すると、たいへん興味深くお聞きになる方が多くいらっしゃいます。それは、展示した資料が、寄贈者の人生と重なるものであることと、見学する方もそのものに対して共感する何かがあるからと思われれます。

* * *

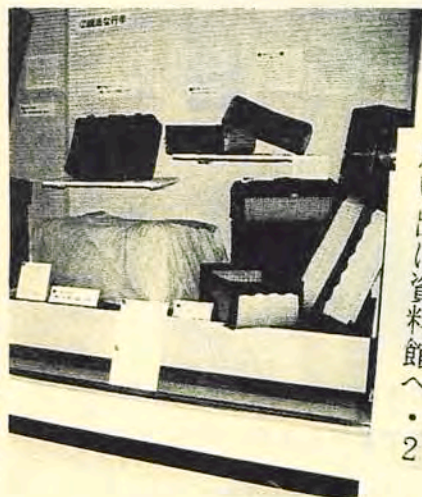
今回展示した資料の多くは、過去五年間のうちに当館へ寄贈されたもののなかから、特にふだんの生活で使われてきたもので、資料は約一五〇件になります。寄贈を受けてからはじめて紹介するものを中心にしていますが、生活の変遷を知るために効果的な「資料」と考えられるものは、何年も前に寄贈していただいたものも展示しています。こうして、寄贈

していただいた資料は、決して一回だけではなく、時に応じてみなさんの目に触れることとなります。そして資料館では、元の所有者、つまり寄贈者の方には展示したことをお知らせし、資料館で「資料に生まれ変わった」ことを伝えます。

家にこういうものがあるけれども、資料館に寄贈したいという電話がかかります。ひとりひとりの「思い出」を、郷土の資料にすることができるとか、次にわたしたち学芸員は、電話をいただいた方とお会いすることになります。

区民寄贈生活資料展

思い出は資料館へ・2



行李いっぱい詰められた資料が、思い出とともに伝えられる。

■展示構成と主な展示資料

1 収納は家事の基本

(1) さまざまな収納具

風呂敷(ウコン染め・記念品)

長持(大・小) 茶箱(大・小)

(2) 調法な行李

各種柳行李 各種竹行李

2 着るものはお手製

(1) 和裁と洋裁

和裁用具(和裁用裁ち板・電気こて・

鯨尺・裁縫箱) 洋裁用具(洋裁用

裁ち板・電気アイロン・卓上ミシン)

和裁教科書類 『それいゆ』

(2) 印半纏は特注品

消防用・鳶職・米屋・炭屋・家根屋・

植木屋・農家・大家の印半纏各種

(3) 身近な職人技・組紐

羽織紐と帯締め(土山弥太郎コレク

ション・橋詰正男コレクション)・

イギリスの組紐作品(写真)

3 違いはどこに

(1) 生活用具の今昔

木製氷冷蔵庫・置き薬箱・洗濯用た

らい・洗濯板・洗濯ばさみ・家計簿

(2) 戦時下の生活品

紙芝居(『殊勲甲』・『落語工夫く

らべ』)・幼児用着物・焙烙・アル

マイト製鍋

(3) ねこあなか集合

「ねこあなか」と「ねこごたつ」九点

4 思い出のアルバム

池袋檀山残雪之景（一九二〇年代）

茅葺き農家の縁側で（一九四二年）

子守をする女の子（戦前） 暮れの餅つき・お供え作り（一九五四年）

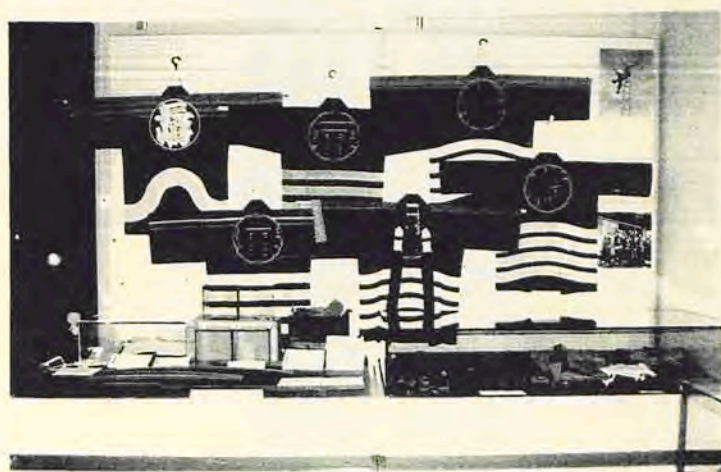
■展示のみどころ

Ⅲのコーナーでは、高田農商銀行や武蔵野鉄道株式会社の記念品としての風呂敷があります。また、防虫効果があるウコンを染料とした木綿の布を接ぎ合わせて作った布団用の風呂敷も珍しいものでしょう。かつてはどの家にもひとつやふたつはあった行李にも、コリヤナギ製の柳行李と竹製の竹行李があることを見直してみましよう。今日でも兵庫県豊岡地方で作られていた柳行李が、豊島区域でも使用されてきたという事実からは、ものの流通を知ることができるでしょう。

Ⅱのコーナーの展示資料からは、既成服が現在ほど豊かではなかった時代に、女性がどのようにして衣類を調達していたかとしていたかその一端がわかります。和裁の後に、足踏みミシンとともに普及していく洋裁。その洋裁の受容は、今日の服飾文化を考える上で重要です。

ところで、同種の資料が複数あると、さまざまながわかってきます。その例として、各種職人さんが着用していた印半纏をあげましよう。細部を見ると、使用目的や場所を考慮して作られている

ことがよくわかります。まず、袖口の裏側の布をみると、鳶職が着用するものは裃が求められたためか、柄物の布が使われています。それから、いわゆる歴史がある家の冠婚葬祭のときには家紋入りの半纏を着用し、その家で働く人たちが同じ半纏を着用しました。葬儀の際に新調したものをみると、袖口の裏側には黒の布地が使用されています。一方、婚礼で使用したものには、色鮮やかな布地が使われていました。また、農家の場合には紺色の布地でした。このように、外からは目立たぬ部分に、個性や習慣を表していたのではと考えられます。



Ⅲのコーナーでは、毎年この時期に見学が頻繁になる小学校3年生を意識した資料を選別しました。その結果、むかしものものと現在資料館で使用している道具を並べて展示するという試みをしました。

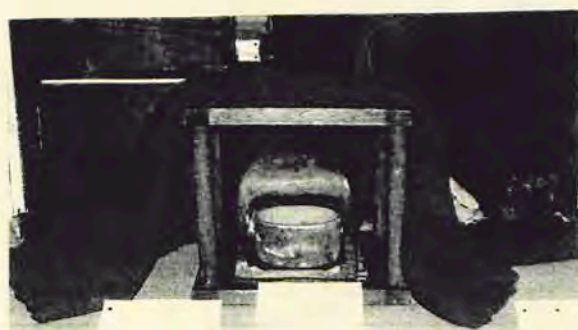


左は大正14年製の木製のたらい。右はポリプロピレン製で資料洗浄用に使用。

さて、当館へ収蔵される資料には、同種類のものもあります。それだけ、一般的に、そして多くの人が使用してきたものだからといえましよう。今回、ねこあんと呼ばれているものを九点展示しました。九点は、形態や材質はほぼ同じですが、ただ、これらのもののなかにはねこごたつと呼ばれるものもあります。個々の寄贈者の話しを総合すると、どうやら、あんかとして使用した人とこたつとして使用した人の違いによる呼称の相違というように思われました。

このように、複数のものが集まり、そして集めるだけでなく、その使用方法を詳しくお聞きし、それを情報として記

録しておくことは重要です。全国的な視野から暖房具としてのねこあんかを見ると、今回、当館で展示したねこあんかと同種のものが各地に存在しています。しかし、一様ではなく形態や呼称に相違があります。そのような相違は、地域の風土と独自の文化的背景によって生み出されたものかもしれません。身近な道具（ねこあんかは使われなくなって久しい）とそれらの小さな相違点に気をつけながら、当区の生活史を考えたいと思います。



戦後、結婚当初に実家から譲り受けたもの。最初はあんかに直接布団をかけていたが、その後、コタツヤグラの中に入れて使った。

Ⅳのコーナーでは写真を展示しました。生活環境の激しい変化がこれらの写真から明らかです。今後、このような写真を広く集め、展示に活用したいと思っていますので、お持ちの読者の方は、当館までご連絡いただければ幸いです。（福岡）

東京第二師範附属

かみのやま

上山の疎開学寮日誌

しばらく中断していましたが当館調査報告書「豊島の集団学童疎開資料集」の続刊が次のように発行されました。

豊島の集団学童疎開資料集(7)
学寮日誌編I

— 東京第二師範附属国民学校 —

I 月岡学寮日誌 一〜四冊

II だるま連報

III 回想(柴田秀雄)

解説

B 五判グラビア六
頁・本文一五八頁
頒価一一〇〇円

豊島区池袋(現在の東京芸術劇場の場所)にあった東京第二師範附属国民学校(現・東京学芸大学附属小金井小学校)の子どもたちは、一九四四年夏、四年生以上を対象に集団疎開を実施しました。アジア太平洋戦争の末期、東京など大都市へのアメリカ軍の空襲が避けられないとみての国・都の方針による戦争継続の



月岡ホテルでのタドン作り(柴田ゆき氏提供)

今回の資料集は、上山疎開者のうち、月岡ホテルを学寮(宿舎)とした四年生男女クラスについての資料を収録しています。これらの資料は、担任の教員だった柴田秀雄氏が保管されておられたもので、夫人の柴田ゆき氏から当館に寄贈・提供いただきました。

Iは、疎開当時、教員が交代で記していた学寮日誌です。行事・授業・交渉・食事・健康状況などの各欄があって、生活の様子をうかがうことができます。たとえば、上山着第一日の八月二十九日には

第一日の夕方、午睡からさめて郷愁に襲はれたるもの数多あれど夕食後先生方の慰安演芸により平癒などと、記載されています。

日誌には、旅館からの印刷物なども貼付されていますが、それらもできるだけ掲載しました。

IIは、主に柴田秀雄先生が作製された東京の親向けの疎開学園だよりです。タイトルは柴田氏が東京から持っていた四年男子クラスのシンボル、木彫りのダルマ(写真・下)にちなんだものです。

一九四五年五月、疎開学童たちは上山温泉を離れ、近くの農村のお寺に再疎開します。この資料は、そうした再疎開の様子、農村での生活、そして敗戦後の状況などを伝えています。



IIIは柴田氏が帰京後、一九五〇年頃から書かれていた回想です。日誌などからはなかなか分からない、引率教員の思いが伝わって、一次資料とは別の意味で興味深いものです。自分たちで「観兵式」を計画・実行する男子学童の姿がクライマックスとなっています。

その他、図画や写真なども多数掲載しています。(あおき)

豊島の集団学童疎開資料集(1)〜(6)
(日誌・書簡編I〜VI)

◇時習国民学校 一三〇〇円

◇長崎第五国民学校 一五〇〇円

◇長崎第二国民学校 一七〇〇円

◇高田第三国民学校・高田第五国民学校 九〇〇円

◇高田第五国民学校(続)

一〇〇〇円

◇西巣鴨第一国民学校・池袋第二国民学校 一一〇〇円

駒込の奇聞二話

●雷公は馬に乗り給うという話の事

巢鴨に大久保なにがしという人があった。享保（一七一六―一七三五）の頃、騎射の稽古から稽古仲間のところへ話をしに立ち寄り、日が暮れる前に暇乞いをしたが、いまだ迎えの家来が来なかった。さらに雨も降りかけていたので、主人は引きとめたのだが、「母が雷を恐れるので、とにかく早く帰りたい。」と言って馬に飛び乗り、騎射笠に合羽などを着て帰りかけたが、筋違御門のあたりからは日も暮れて雨はしきりに強く降りつけ、雷鳴もおびただしく響いた。一目散に馬を駆って帰るけれども、駒込の辺まで来て町家はいずれも戸を締めきっているところに、一声きびしい雷鳴が轟くと馬が驚いて、とある町家の戸を蹴破って床の上へ前足を上げて馬が立ち止まってしまった。それから、なんとか馬を引出して、我が家に帰り着いた。

ように」と家来に申しつけて遣わしてみると、家来は帰るなり大いに笑って申上げた。「昨夜の雷は、駒込片町（文京区本駒込）のあたりへ落ちたという噂がありました。何軒目の何の商売をしている者の家へ落ちたと町の者が申しているの、何時ごろどのような様子だったかとたずねると、五つ時前（午後八時前）ぐらいだったか、そのとき雷の落ちた処は、戸も蹴破られている。世間では、雷は連鼓を背負って、鬼の姿だと申し習わして、絵にもそう描き、木像にもそう刻んでいるけれども、大きな偽りである。目の当たりに昨夜の雷公をみたところ、雷様は馬に乗って陣笠のようなものをかぶりなさっている。落ちなさってから暫くして馬を引き返し、雲の中にくつ音がしていたが、天に上るにつれて、くつ音もだんだん遠くなっていた。と申しております。」家来がそう申上げると「そのように雷の仕業とされているのなら、雷ではなくて人だったと言うのも却って無粋だ。」といって済ましたということだ。

前号では根岸鎮衛（ねぎしやすもり）

の『耳袋』から巢鴨の話を紹介しましたが、『耳袋』の中では、巢鴨住まいの雷様が、馬に乗ってその名も駒込に落ちたようです。

駒込は現在の豊島区駒込辺りから文京

区本駒込・千駄木・向ヶ丘を含む一帯の総称でした。駒込村は上下二村に分かれ、上駒込村は、およそ現在の豊島区駒込一〜七丁目にあたり、藤堂家下屋敷と、それら武家屋敷に出入りする植木屋が多くありました。下駒込村は、ほぼ文京区にあたります。

『御府内備考』（文政十二（一八二九）

年）によると、駒込の地名のおこりは、日本武尊が東夷征伐の時に、高い所からこのあたり一円の林に味方の馬が集められ、木々につながれているのを見下ろして【駒こみたり】と言ってから、素盞鳥（いるさ）山という名を改めて駒込林と呼ぶようになったいわれます。しかし『新編江戸志』（寛政年間一七八九〜一八〇一成立）では、このあたりの地形に山がみられないので、牛込、馬込などの地名と同様に往時の牧養の地であったことからついた地名ではないかとしています。

『耳袋』から駒込奇聞をもう一話

：将を射んと欲すれば先ず馬を射よ：

●手段にて権家へ取入りし事

ある男が、なんとか出世をしようとしていろいろ考えたけれど、元来貧しくてたよになる伝手もないので、明け暮れむなししく心を煩わせていたが、ふと思いついて、最寄りの駒込あたりといえる所に当時繁栄していた権門の菩提寺があつ

たので、思い立って毎日その本堂に参詣して、ねんごろに祈り始めた。雨雪はもとより、大風そのほかのどんな天候であっても毎朝時間を決めて参詣していた。庭を毎日掃き掃除していた寺男らも、いつとなく顔見知りになって「今日はお早いですね。」或いは「寒いですね。」、「暑いですね。」と挨拶を交わしていた。

或る時、和尚が男の事を聞いて「毎日来ていただいているようならば、今度来た時ここへお通ししなさい。」と寺男に申しつけた。そこで寺男が男を方丈へ案内したところ、和尚は男に茶などをふるまって、「さてさて、貴方は毎日日本堂へいらつしやるが、どうした訳でしょうか。」とたずねると、「私には願いがあつて、何とか人並みに御奉公致しましたが、貧しさにその勤めもままなりません。ある夜不思議にこの御本尊の霊夢を見たため、ありがたく思つて毎日参詣しております。」とまことしやかに語った。和尚も物の分かった者であつたので、笑つて、「当寺の本尊の霊夢はあつたかも知れないが、御利益があつたと言われたことはない。それでは、和尚がその利益を取り持ちいたしましょう。これこれのようになさい。」と言つて、その檀家である権家へ頻繁に願い出て男を出入りさせ、ほどなく男の願いは成就したということだ。

（葉師寺）

《新・豊島氏紀行 その五》

—東京都北区豊島 医王山清光寺—

豊島氏の中で有名な人物としては、豊島勘解由左衛門尉（かげゆざえもんのじょう）と、今回紹介する清光寺〔右の写真は参道からの撮影。下の写真は本堂〕にゆかりの深い豊島権守（ごんのかみ）（清元（清光）の二人をあげることができる。）

勘解由左衛門尉は、現代に伝わるいくつかの系図で豊島泰経とされており、四七八（文明一〇）年の豊島氏滅亡の時の当主として、石神井城落城にまつわる



もともと豊島氏は桓武平氏の流れをくむ秩父平氏であると言われ、豊島を名乗るのが清元の一代前の康家からであると考えられており、そのころ（一一世紀ごろ）から豊島の地に本拠を構えるようになったと考えられます。そして、頼朝の下で勲功をあげることによって、豊島郡域での勢力拡大を図った人物が清元であるということが出来ます。

さてこの権守清元ですが、従来は豊島清光（きよみつ）という名前前で一般的に知られていました。これは江戸時代以降に作られた系図や伝承に寄るところが大きいと考えられます。ところが、権守が活躍していた時代に近い時期に作成された系図には「清元」や「清基」という字で表記されていることから、最近の研究では名前が「清元」（きよもと）で、「清光」は法名で「せいこう」と読むのではないかとされています。

そこで、今回紹介する清光寺ですが、一説では豊島氏の居館があった場所であるとされていますが、「新編武蔵風土記稿」では清光（清元）の開基で、寺号もその名前から付けられたとしています。しかし、名前を寺号とするのは不自然です。やはり「清光」は法名と考えたほうがいいのかもしれません。

また この寺には豊島清光の像が伝えられています「右下の写真」。一七四二



(寛保二)年に造られたものですが、ご覧のように僧の姿をしており、出家した後の姿で彫られています。

なお、別に伝わる江戸時代の始めに作られた縁起では、常康山清光寺として一五七（保元二）年に清元の父である豊島康家によって開かれたものだとあります。そして、一四七七（文明九）年の豊島泰経と太田道灌との戦いで降没落していたのを布川城主である豊島頼継（『かたりべ58号』『新・豊島氏紀行その二』参照）によって中興されたものの、一五六三（永祿六）年に焼失してしまい、それを豊島明重（『かたりべ64号』『新・豊島氏紀行その四』参照）が再興したとも縁起に記されています。（いとう）

*
|
*
|
*

【清光寺：宮団地下鉄南北線、王子神谷駅下車、徒歩10分】

《展示報告》 二〇〇一年度第二回收藏資料展
竹本焼と園芸・盆栽文化——中島英雄コレクションを中心に——

昨年三月豊島区に寄贈された故中島英雄氏の竹本焼コレクション約七〇点を一堂で紹介した展示会を、昨年一〇月十二日から今年一月十三日まで開催いたしました。(寄贈の経緯および展示内容については、かたりべ63号・64号をご覧ください。)

今回の展示目的は大きく二点ありました。一つは、「竹本焼」という忘れ去られた地域文化財の存在を広く一般に紹介すること。もう一つは、盆栽界における竹本鉢の現在の評価と、陶磁器研究者の竹本焼の歴史的評価とを結びつけ、さらに近代の地場産業の視点から明治期の竹本焼を再評価する、というものでした。

その目的がどの程度達成されたかという評価は今後の分析が必要ですが、会期中の入館者数は三三・七三名で、清水市、瀬戸市、多治見市、尼崎市など遠方から見学に来られる方もいました。特に盆栽関係者や陶磁器研究者、陶芸家などの関心が高く、それぞれの専門の立場から竹本焼に関して多くの貴重な情報を提供していただきました。

また、数名の竹本焼所蔵者と知り合い、竹本焼を追加調査させていただいたり、竹本家ゆかりの方から竹本家の系譜や製品の注文覚の文書を拝見させていただく幸運に恵まれました。さらに、「含翠園」の窯場で陶工として働いていた中村孫六の存在が、お孫さんの来館によって明らかになるという、うれしい「新発見」もありました。

最後にアンケート(二一六名)の中から見学者の声を一部ご紹介します。

◇何故、郊外の地域にこのような焼物が誕生したのでしょうか!現在発掘されている江戸時代の下屋敷との文化的関係などを今後に期待します。(葛飾区・女)

◇焼物のつくり方などを詳しく図説してあるとよいと思った。(古河市・男二〇歳)

◇とても内容の濃い展示だと思えます。幕末・明治の文人趣味の視点からみても非常に興味深い。これを視野に入れて、これからは竹本焼の展示を続けてほしい。(白井市・女二七歳)

◇近代における地場産業としての園芸

という非常に地味なテーマに対し、きめこまやかな調査がされていて改めて感服しました。(国立市・男二七歳)

◇明治時代に小品盆栽の鉢を焼いた竹本焼は、現在小品盆栽界では地方ではめったにお目にかかれない鉢で貴重なものです。盆栽界の至宝として今後も未永く保存してほしいものです。(清水市・男六四歳)

今回の展示にご協力いただいた関係機関ならびに関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。今後も国内外に眠る竹本焼の所在調査を引き続き行なうとともに、展示の成果を調査報告書としてまとめたいと考えています。(横山)



竹本焼をスケッチする(区立大成小学校3年生)

刊行物のご案内

研究紀要『生活と文化』第十一号が刊行されました。学芸員の調査研究の成果を発表しています。また巻末には二〇〇〇年度の事業報告(年報)を掲載しています。ぜひご利用ください。

◆掲載論文

・「豊島区地域における江戸の名数景勝地について」(葉師寺君子)

・「高田農商銀行襲撃事件の考察」(青木哲夫)

・研究ノート「東京市街の鉄道敷設状況——鉄道布設願書分析の中間的考察——」(伊藤暢直)

・調査ノート「豊島区の湧き水をたずねて」(横山恵美)

◆年報(含・雑司が谷旧宣教師館) 価格800円(B5判95頁)

◆価格800円(B5判95頁)

かたりべ 65号

豊島区立郷土資料館だより

※

2002年2月20日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4

TEL 03-3980-2351

AM9:00~PM4:30

月曜・祝日・第3日曜休

(編集担当:横山)